



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3382 号 2016.12.4 発行

やまゆり園、ダンスで笑顔 相模原、事件後初の園内取材 桜井健至



朝日新聞 2016年12月3日  
 体育館で開かれた「ダンスチャレンジ教室」で踊る「津久井やまゆり園」の入所者たち=3日午後、相模原市緑区、小玉重隆撮影

入所者19人が犠牲になる事件が7月



にあった相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」で3日、「ダンスチャレンジ教室」が開かれた。会場の体育館で、約50人が音楽に合わせて体を動かした。事件後、園内にメディアの取材が入るのは初めて。

養護学校などでダンス教室を開く活動を続けている一般社団法人「カナウェル」（川崎市宮前区）が企画した。お笑いコンビ「オリエンタルラジオ」が率い、年末のNHK紅白歌合戦に出場する「RADIO FISH」のつとむさん（28）が講師としてテンポのよいダンスを披露すると、入所者たちもリズムに合わせて踊った。神奈川県によると、警察の現場検証のため、男性入所者20人以上が8月末まで体育館で生活を余儀なくされていた。

「ふつう」みんな違うじゃん！ 愛知県人権ポスター、ネットで好評

中日新聞 2016年12月3日

人権週間（四～十日）を前に、名古屋市中区の金山総合駅で掲示された愛知県の人権啓発ポスター=写真=がツイッターなどの会員制交流サイト（SNS）で話題になっている。「わたしの『ふつう』と、あなたの『ふつう』はちがう」。身近な会話を漫画にして訴えるポスターに、「わかりやすい」「考えさせられた」といった書き込みやリツイートが相次ぎ、愛知県は「人権について考えるきっかけにしてほしい」と予想外の反響に喜んでいる。

「ひとりだけ丸がり頭だ〜！」「仲間外れだ〜」。小学校の教室で、丸刈り頭の男の子についてそう話す子どもたち。すると近くにいた女の子が「そういうわたしは、太ってるわ」。男の子は「僕は背が低い」。最後は皆で「ほんとだ みんな違うじゃん！」。シンプルな会話から「人はそれぞれ違う」とのメッセージが伝わってくる。

ポスターは、人権週間に合わせ、愛知県が毎年制作。今年は愛知県蒲郡市出身の漫画家大橋裕之さん（36）がイラストを手掛け、子どもをはじめ女性や性的少数者、障害者、

インターネットでの人権などテーマごとに七種類を漫画で仕上げた。

県人権推進室によると、ポスターは当初、人権週間期間中に県内の鉄道駅などで張り出す予定だったが、掲示物が多い金山総合駅では期間中での枠が得られず、十一月二十一～二十七日に掲示された。



するとポスターの写真がツイッターにアップされ、「的確ですばらしい」「漫画の何気なさが説得力を与えている」といった書き込みが急増。リツイートは十一月二十八日現在で三万件を超えた。複数のインターネットニュースで「愛知県の人権ポスターに称賛の嵐」などと紹介されたほか、フェイスブック（FB）でも「普通に囚（とら）われる時代は終わっている」「いろんな個性で違うのが当たり前」といった書き込みが相次ぎ、ポスターはネットを通じて拡散し続けている。

漫画を描いた大橋さんは「こんなに話題になるとは」とびっくり。「身近なやりとりの中で人権について気付いてもらえるようシンプルにしようと心掛けた。伝わったのならとてもうれしい」と話した。愛知県人権推進室の今飯田将成（いまいいだまさなり）主事は「これを機に人権への意識が高まってくれれば」と期待を寄せる。

ポスターは五～十一日に名古屋市市中村区の名古屋駅など愛知、岐阜両県内のJR、名鉄の十二駅と名古屋市営地下鉄市役所駅などで掲示されるほか、県人権推進室のホームページでも閲覧できる。（日下浩樹）

#### ◆あすから10日まで

<人権週間> 1948（昭和23）年12月10日に国際連合が世界人権宣言を採択したことによる10日の「人権デー」に合わせ、法務省と全国人権擁護委員連合会が毎年12月4日から10日までを人権週間と定めている。期間中は全国各地でさまざまな啓発活動が繰り広げられる。

障害ある次男に学んだ命の重さ 稲川淳二さん講演 神戸新聞 2016年12月4日



次男への思いを語る稲川淳二さん＝姫路市本町

人権週間（4～10日）に合わせ、タレントで工業デザイナーの稲川淳二さん（69）が3日、兵庫県姫路市本町のイーグレひめじで講演した。先天性の障害があり、4年前に他界した次男について語った。

姫路市人権啓発センターが主催。約320人が聴き入った。

稲川さんは「いじめが増え、困った人への無関心が強まり、情けない状況だ」と日常の実感を話した後、次男について述懐した。

次男は頭の骨などに異常があり、生後4カ月で大手術を経験。医師に「助からないか、助かっても普通の生活は無理だ」と告げられたといい、「生きていても大変。障害者の父親だと認めたくない気持ちもあった。助からない方がいい、と思ったこともある」と当時

の不安を吐露した。

だが、小さな体で手術を乗り越えた次男と対面した瞬間、「生きようとしている」と実感。「自分を恥じた」と振り返った。

次男が亡くなった後の喪失感の大きさにも触れ、「命ほど重いものはない」と力を込めた。（宮本万里子）

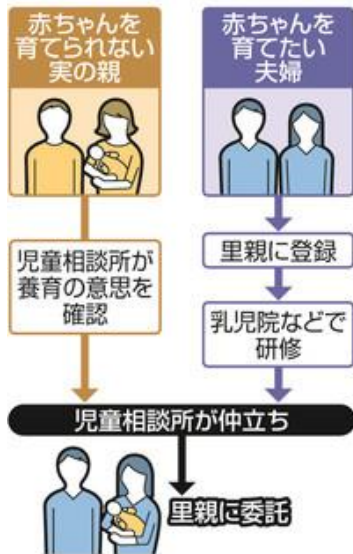
知的障害児 抗精神病薬、「自傷防止」1割に処方 過剰投与、副作用の危険

毎日新聞 2016年12月4日

主に統合失調症の治療に使われる抗精神病薬が知的障害児の約1割に処方されていることが、医療経済研究機構などのチームが健康保険組合加入者162万人を対象に行った調査で分かった。人口に対する統合失調症患者の割合よりはるかに高く、うちほぼ半数で年300日以上も薬が出ていた。チームは「大半は精神疾患がないケースとみられ、知的障害児の自傷行為や物を破壊するなどの行動を抑制するためだけに処方されている可能性が高い」と警鐘を鳴らす。

0歳からの里親広がり 委託率1.8%の都、積極支援へ 東京新聞 2016年12月4日

ゼロ歳児の里親委託 (東京都の計画)



東京都は来年度から、実親と一緒に暮らせない子どもを養育する里親に、ゼロ歳児を積極的に委託する方針を決めた。人見知りが始まると里親との交流が難しくなるため、できるだけ早い時期の委託が望ましいと判断した。ゼロ歳児を含めた児童虐待の都への相談件数は増え続けているが、里親への委託は進んでいない。児童相談所（児相）が、出産前から養育に困難を抱える実親の相談に乗るなど、今後体制を見直していく。

都によると、二〇一四年度、実親が育てられず保護されたゼロ歳児二百二十七人に対し、里親に託されたのは四人で委託率は1.8%にとどまる。里親に委託した実績がある都道府県で最も低かった。最高は二十四人を委託した北海道の72.7%。背景には、早期に預けることでの委託後のトラブルなどを懸念する都の慎重な姿勢もあった。児童全体を見ても一四年度、都で里親に託されたのは、三千九百六十一人中四百四十五人（11.2%）で全国平均（16.5%）より低い。

都への虐待の相談件数は、〇八年度は三千二百二十九件だったのが一五年度は九千九百九件と三倍以上になっている。一三年度の都の調査では、乳児院にいる子の三割に虐待による心身の障害が残っていた。保護した子どもの処遇などを決める児相の一時保護所での保護期間が長期化するなど、職員の対応が追いつかない部分も出てきている。

六月の児童福祉法の改正で、家庭的雰囲気の中で子どもを養護していくことがより求められるようになったこともあり、都の児童福祉審議会は十一月「乳児期は特定の大人との愛着形成に極めて重要。できる限り早期に養育家庭委託に結びつけることが大切」と提言。ただ、実親の同意が得られにくい実態を踏まえ、「丁寧かつ慎重なプロセス」を都側に求めた。

都は一七年度、望まない妊娠や経済的な理由などで、子育てが困難だと考える親からの相談を、出産前から受け付ける児童福祉司の増員などを計画。里親との仲立ちも積極的に進めるため、乳児院を中心にした里親への事前研修などにも予算を計上したい考えだ。戸籍上の親子となる「特別養子縁組」を前提とした里親への委託にも力を注ぐ。

都内の里親から約二百六十人が参加するNPO法人「東京養育家庭の会」の青葉紘宇（こうう）理事長は、「赤ちゃんを養育家庭に託すのは、実親にも児相にとっても不安かもしれないが、社会全体で乗り越えていく問題だ」と話している。

## ベビーカー、はしご・脚立... 「安全認証」でも事故1259件

東京新聞 2016年12月3日



SGマーク＝製品安全協会提供

構造や表示などが安全基準を満たしていることを示す「SG（セーフグッズ）マーク」が付いたベビーカーなどの製品を巡る事故が、今年三月までの約十年間で少なくとも千二百五十九件起きていたことが、製品評価技術基盤機構（NITE）の初集計で分かった。

誤った使い方や不注意が原因となった例が目立つが、事故をきっかけに製品の問題が分かり、基準などの見直しにつながった例もある。NITEは「マークがあっても油断せず、正しい使い方を徹底してほしい」と指摘。マークを発行する製品安全協会（東京）は「製品の欠陥が原因の人身事故は損害賠償を受けられる。誤った使い方や不注意が原因でも基準見直しにつながる場合もあるので申し出てほしい」としている。

NITEによると、製品別では多い順にベビーカー七百三十二件、はしご・脚立百三十六件、自転車の幼児用座席八十五件など。死亡事故が一件あったほか、重傷百七十九件、軽傷三百件。人身事故が全体の四割を占めていた。

ベビーカーでは、折り畳み式製品で開閉する操作や振動でねじが緩むなどして壊れる事故が多かった。開閉時に幼児が可動部に指を挟み重軽傷を負ったケースがあり、指を挟みにくくするため可動部の隙間を五ミリ未満とする基準の見直しにつながった。

はしご・脚立では、兵庫県で二〇一〇年に屋根の工事で使用中の男性が転落、死亡するなど、誤使用や不注意の転倒、転落が大半を占めた。自転車の幼児用座席では、子どもが足を乗せる部分が走行中に外れ、後輪に足が巻き込まれてけがをする事故が多かった。他には「調理後にふたが外れて中身が飛び散り、やけどをした」といった圧力鍋六十三件、「使用中に本体が割れてやけどをした」といった湯たんぼ四十五件などが目立った。

NITEには十年間に製品全体で計約三万六千件の事故情報が寄せられたが、激しく燃

### SGマークの付いた製品の事故

製品	事故件数
ベビーカー	732
はしご・脚立	136
自転車の幼児用座席	85
圧力鍋	63
湯たんぼ	45
その他	198
<b>合計</b>	<b>1259</b>

※今年3月までの約10年間、製品評価技術基盤機構が集計。その他は歩行補助器・補助車、踏み台、ライター、フライパン、電気炊飯器など

えるなどしてマークを確認できなかった製品もあった。SGマーク付き製品の事故は、実際にはさらに多いとみられる。

<SG（セーフグッズ）マーク> 暮らしに身近な製品の事故防止や安全確保、被害救済を目的に1973年に設立された製品安全協会が同年から発行している。乳幼児用品や福祉用品、家具、台所用品、スポーツ・レジャー用品といった幅広い分野で、製品の構造や強度、耐久性、安定性などの安全基準を定め、適合する製品に交付している。マークが付いた製品の欠陥が原因で人身事故が起きたと認められる場合は1人1億円を上限に損害賠償が受けられる。

## 認知症予防に「脳活ソフト」神戸のベンチャー開発

神戸新聞 2016年12月3日



脳活バランスで認知機能を測定する女性＝尼崎市西長洲町2、アマルネス・ガーデン

認知機能を多面的に測定し、認知症の程度やリスクを評価できるソフト「脳活バランス」を、神戸市中央区の医療機器ベンチャー「トータルブレインケア」が開発し、医療・介護現場への普及を目指している。脳の機能変化を経時的に記録でき、同社は「認知症を前段階で発見し、進行の予防に役立ててほしい」としている。（田中伸明）

認知症は、脳の器質的な変化で認知機能が低下し、生活に支障が出た状態。決定的な治療法はないが、前段階の軽度認知障害（MCI）や健常時から治療・予防を始めれば、進行を遅らせられるとされる。しかし、これまでは認知機能の客観的な評価や、経時変化の追跡に課題があった。

### 五つの要素

脳活バランスは認知機能を、（1）見当識（2）注意力（3）記憶力（4）計画力（5）空間認識力の五つの要素で測定する。認知症に伴うさまざまな症状やリスクはこれらの機能低下が重なって生じ、転倒は（2）（5）、火の不始末は（2）（3）と抑制（他にしたいことを抑える）力、徘徊（はいかい）は（1）～（4）の衰えが原因とされる。

測定は、インターネットのクラウドサービスを通じてソフトを入手し、パソコンの画面をタッチして行う。散らばった数字を順に追う▽四つのライトが光る順番を記憶する▽見本と同じ図形を多くの中から選ぶーなど、臨床結果を踏まえ選定された12の課題をこなす。結果は、機能ごとの得点分かる五角形のグラフで示される。

「もともとは脳の機能訓練『脳トレ』での利用を想定していたが、医療関係者から『診断にも使える』と反響があった」と、同社研究室長の河越真介さん（55）。さらに活用の幅を広げるため、大学の研究者らとともに「認知機能研究会」をつくり、臨床データの蓄積を目指している。

### 介護施設に導入

尼崎市の介護・医療複合施設「アマルネス・ガーデン」では9月から、デイケアの通所者を対象に脳活バランスを本格導入した。同施設は認知症予防プログラムを開発中で、新規通所者の機能評価などに使っている。広報マネージャーの山本雅則さん（38）は「通所者は楽しみながら課題に取り組んでいる。認知症予防を施設の目玉としてアピールしたい」と話す。

脳活バランスは現在、医療機関や福祉施設向けに販売。月額1万5千円（別に初期費用が必要）。来春には家庭用も販売開始する予定。価格は月額1500円程度を見込んでいる。

問い合わせは、トータルブレインケア「脳活バランス」のウェブサイトの問い合わせフォームで。

【認知症】 脳の萎縮や脳細胞の壊死（えし）で認知機能が低下し、日常生活に支障をきたす状態。近年は徘徊（はいかい）したり暴力的になったりする周辺症状（BPSD）が問題になっている。糖尿病や高血圧などの生活習慣病がリスクを高めるとされる。アルツハイマー型や脳血管性、レビー小体型、前頭側頭型がある。

動けない人も話せない人も 歌えばみんなハーモニー 東京新聞 2016年12月4日  
最後の「心の唄」コンサートへの来場を呼び掛ける木谷正道さん＝東京都内で



障害者福祉への理解を深め、障害者の社会参加を促す障害者週間が3日、始まった。9日までの期間中、各地で関連イベントが開かれる。首都圏では4日、知的障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件があった相模原市で「障害者週間のつどい」（市立あじさい会館）が、東京都杉並区で「ふれあいフェスタ」（セシオン杉並）などが開かれる。

元東京都職員で、アマチュアバンドのボーカル兼リーダー木谷正道さん（69）＝神奈川県平塚市＝は二〇〇六年から「心の唄」コンサートを続けてきた。翌〇七年から障害者も参加し、身体を思うように動かせない人が舌でギターを鳴らすなど、音楽が生きる意欲につながる場面を何度も見てきた。

コンサートは十周年となる今年を一区切りとする予定で、今年十一月一日に都内で開く最終公演を「集大成のステージに」と木谷さんは意気込む。（奥野斐）

「故郷」や「島唄」「昂（すばる）」…。コンサートでは、昔懐かしい歌やJポップなどを木谷さん率いる「心の唄バンド」七人が披露し、聴覚障害の女性メンバーは「手話唄」をみせる。

木谷さんは都で情報企画担当部長などを務め、〇七年に退職した。高校一年でギターを始め、大学では合唱サークルにいた経験を生かし、退職前の〇一年から、近所の宅老施設などを訪ねて歌うボランティアを始めた。定期的に施設に通ううち、普段は話さない認知症の女性がにこっと笑って口ずさんでいるのに気付いた。「歌で人とつながる喜びを知った」という。

知人のシンセサイザー奏者と〇六年四月、新宿で初めて「心の唄」コンサートを開催。バンドは障害があるメンバーが加わったり、障害者施設で演奏する機会も増えたりして、〇七年のコンサートから副題に「共に生きる」と添えた。

「障害のある人たちとの出会いで、大きな影響を受けた」。東京都足立区の施設では、コンサート中、重い身体障害がある男性が近づいてきて木谷さんのギターの弦を舌で「ポロン」と鳴らした。別の演奏会では、目だけで意思疎通する青年が、木谷さんの歌詞の間違いを指摘し、周囲を驚かせたことも。「彼らは、しっかり歌を聴いてくれる。内側は同じだと実感した」

一三年のコンサートから、交通事故や脳卒中などの後遺症で言語や記憶などに障害が生じる高次脳機能障害者と家族による合唱団「ひだまりの会」が出演。昨年は知的障害者施設の利用者と職員が結成したバンドが演奏した。ベースとして参加した職員、出縄守英（いでなわもりひで）さん（53）は「彼らが自由に、楽しく歌う姿に会場も和やかな雰囲気になり、本人たちの自信にもつながった」と話す。

音楽の輪は広がっているが、毎年、千人規模のホールを借りてのコンサートは負担も大きく十周年で一区切りとすることを決めた。最終公演では、過去の出演者をはじめ総勢六十人が、木谷さんのバンドと競演する。「大きな声で叫んでしまう男性が観客席にいても、周囲が温かい目で見守るようなコンサートになった」と木谷さんは感慨深げに語る。

今後、バンド活動はさらに充実させるつもりだ。「これまで以上に障害者や高齢者の施設、

東日本大震災の被災地などに出向き、聴衆のより近くで歌を届けたい」と見据える。

#### ◆品川区「きゅりあん」で

「心の唄'16 共に生きる 10周年」は11日午後2時から、東京都品川区東大井の「きゅりあん（区立総合区民会館）」で。JR京浜東北線、東急大井町線、りんかい線の大井町駅から徒歩1分。入場料1200円（前売り券1000円、障害者・小中学生500円）。問い合わせは事務局の大石明広さん＝電090（9856）5146＝へ。

#### パンやアクセサリ、障害者が合同販売会

東京新聞 2016年12月4日

下野市内の障害者施設などで作られたパンやアクセサリ、手工芸品などの合同販売会が五～九日、同市役所で行われる。時間はいずれも午前十一時半～午後一時。

販売会は、内閣府が定める障害者週間（三～九日）に合わせて昨年からはじまった。昨年は石橋庁舎で開かれたが、今年は五月に完成した市の新庁舎での初開催となる。

販売する事業所は五つで、毎日交代で出店する。購入した人には、クッキーや割り箸など小物のプレゼントも用意。期間中、同じ会場で施設利用者の芸術作品の展示も予定している。

#### 丸紅 共生施設「ひだまり」へ助成金 「福祉充実に」 佐賀新聞 2016年12月04日



施設側に助成金の目録を手渡す本郷孝博丸紅九州支社長（左）＝多久市東多久町の「ぬくもいホームひだまり」

高齢者や障害者のデイケアサービスなどを展開する多久市東多久町の地域共生ステーション「ぬくもいホームひだまり」に2日、大手商社丸紅が運営する福祉基金から助成金が贈られた。同施設は助成金で福祉車両を購入し、「地域での活動に幅が出る」と喜んでいる。

贈呈式で、本郷孝博丸紅九州支社長が施設を運営する社会福祉法人「明日香」の金ヶ江良子理事長らに目録を手渡した。本郷支社長は「私にも86歳になる要介護の親がいて、毎朝の車での送迎の厳しさはよく理解できる。助成金を地域福祉の充実に役立ててもらい、利用者にいつまでも元気でいてほしい」と激励した。

同施設は、利用者の送迎にこれまで一般車両2台だけで対応していた。平智子施設長は「新しい福祉車両は車いすごと乗車でき、職員の負担が大幅に軽減できる」と声を弾ませていた。

丸紅は福祉を目的とした基金を1974年に立ち上げ、全国から助成先を募っている。今回は563件の応募から64件を選び、総額1億円分を助成した。

#### アオギリをイメージ 宇都宮の「若草作業所」、施設の外観を一新



東京新聞 2016年12月4日  
緑色の葉をイメージした手形を壁に付けていく障害者ら＝宇都宮市で

宇都宮市若草の障害者支援施設「若草作業所」の外壁が、アオギリの木の幹と葉をイメージした外観に生まれ変わった。ボランティアで行われた職人の塗装作業に、施設で働く障害者たちが仕上げに協力。壁に手形のペイントを施して葉を表現した。

日本塗装工業会県支部と県塗装業組合が毎

年連携し、十一月十六日を「いいいろ塗装の日」として奉仕活動をしている。

作業に参加した障害者九人は、職人から塗料を手付けられると大喜び。鮮やかな葉に見えるように壁に向かって慎重に手を当てると、出来上がりを確かめて満足そうにしていた。

若草作業所の谷田部洋子所長は「見た目が明るくなった。目立たない場所にあるので、多くの人の目を引くことになってありがたい。近隣住民との交流のきっかけになれば」と期待していた。（藤原哲也）

## 消費者教育の取り組み視察 松本担当相が来県

徳島新聞 2016年12月4日



消費者教育の取り組みについて参加者と意見交換する松本消費者行政担当相（中央）＝徳島市の城西高校

松本純消費者行政担当相が3日、徳島県を訪れ、徳島市と板野町で消費者教育の取り組みや高齢者の見守り活動を視察した。松本氏の大臣就任後の来県は9月に続き2度目。

徳島市の城西高校では、県内で消費者教育に取り組む弁護士や大学関係者ら13人による意見交換会に参加。「若者向けの消費者教育の推進」をテーマに話し合った。

社会や環境に配慮した消費行動「エシカル（倫理的）消費」の学習の一環で、同校の生徒が藍染を行っている様子を見学。松本氏も生徒の説明を受けながら藍染を体験した。

板野町役場では、消費生活に関係する機関・団体で構成する町消費生活地域協議会が行っている高齢者や障害者の見守り活動について聞いた。

視察後、松本氏は報道陣に対し「エシカルという理念が徳島だけで醸成されるのではなく、全国に広がっていくことができればいいと強く感じた」と述べた。消費者庁の徳島移転に関しては「(全面移転と一部移転の) どちらということは決まっていない。充実した消費者行政を進めるために何が必要かを検討したい」と述べるにとどめた。

## 障害者スポーツでフォーラム＝パラメダリストら意見交換－福井

時事通信 2016年12月4日

「障がい者スポーツフォーラムふくい」のパネルディスカッションで発言する陸上パラメダリストの高田稔浩選手（右から3人目）ら＝4日午後、福井市の福井テレビ

障害者スポーツのこれからを考える「障がい者スポーツフォーラムふくい」（福井テレビ主催、時事通信社・内外情勢調査会共催）が4日、福井市内で開かれ、パラリンピックの金メダリストらが意見交換を行った。

フォーラムでは、日本財団パラリンピックサポートセンターの小倉和夫理事長が基調講演。パラリンピックの歴史や1998年の長野冬季パラリンピックを契機に、同県内でバリアフリー化が進んだことなどを紹介した。

パネルディスカッションに登場したアテネパラリンピック陸上車いすマラソンなどの金メダリスト、高田稔浩選手（51）は「障害者がスポーツをすると、やったらやっただけ自分の成長につながる。自分自身を好きになる効果がある」と障害者スポーツの価値を語った。

フォーラムには自治体や企業の担当者ら約150人が参加。福井県では2018年10月に全国障害者スポーツ大会が開催される。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

